

生徒との日常の関わりを大切にした生徒指導

－問題行動の拡大を防ぎ、心が通い合う学校にしていくために－

カウンセラー研究員 杉山 健（川崎市立長沢中学校）

I 主題設定の理由

学校では問題行動を起こす生徒に対して多くの教師が関わり、問題解決を試みる。しかし、日々の対応に追われ、落ち着いて学校生活を送っている生徒に目を向けられなくなってしまい、その結果、一部の問題行動が学年全体まで広まってしまうということはないだろうか。

吉田は「学校内において、生徒は『まじめな生徒』と『中間的集団』『逸脱した生徒』に分けることができる。問題行動の未然防止と拡大を防ぐためには『まじめな生徒』と『中間的集団』にいかにより多くの労力をかけられるかにある¹⁾」と述べている。

そこで、本研究では、問題行動を起こす生徒の指導のみに比重を傾けず、落ち着いた学校生活を送りたいと考えている生徒に対して教師が多面的に関わることで、関係を良好に保つとともに、それらの生徒の学級・学校での満足感を高めることで、問題行動の拡大を防ぎ、生徒と教師の心が通い合うあたたかい学校を目指すための手立てを探るために主題を設定した。

II 研究の内容

1 本校の生徒に関する現状把握

(1) 生徒の様子と地域性

明るく元気な生徒が多く、教師に対して人懐こく接する。学校行事に対して熱心な生徒が多く、体育祭では縦割りの集団を作り、応援練習を中心に一生懸命に取り組むことができる。合唱コンクールでは様々なドラマを経てクラスが一つにまとまっていき、ホール一杯に素晴らしい合唱を響かせることができる。文化祭でもユーモアのある演示と工夫された展示で大いに盛り上がる。中には無気力な生徒もいるが、大きな逸脱行動もなく、集団の中に入り、本番ではしっかりと取り組むことができる。部活動に対しても熱心で、日々一生懸命練習に励み、県大会に出場する部活動も増えてきた。課題は、行事や部活動での取組を、日々の学校生活につなげていくことである。

学習に関しては、意識が高く、理解力も高いが、評価へのこだわりが強い面もあり、評価の有無によって物事の取り組み方が異なることもある。何事に対しても最後まで一生懸命に取り組む生徒を育てていくことは今後の本校の課題の一つである。

(2) アンケート調査の実施

学校への適応状況や自己肯定感、教師との関係等について本校生徒の実態をよりつかむために、学校生活におけるアンケート調査を実施した。第1回目は7月17日(金)に全校生徒539人を対象に行っ

¹⁾ 吉田順『荒れには必ずルールがある』学事出版 2013年 p.13

た。質問の内容は国立教育政策研究所の「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」²より抜粋した。

2 研究主題に近づけるための課題の設定

7月のアンケートの結果等から、以下の3つの課題を設定した。これらの課題解決のための取組を3本の柱として学校全体で進めていくことが、主題に迫るために必要なことと考えた。

(1) 落ち着いた学校生活を送りたい生徒と教師とが良好な関係をつくる

学校生活の中で、生徒と教師の良好な関係をつくることは、生徒指導に大きな影響を与える。『生徒指導提要』³では、問題行動の未然防止のために生徒指導を進めていくうえで基盤となるのは「児童生徒一人一人についての児童生徒理解の深化を図ること」としている。また「教員と生徒との信頼関係を築くことも生徒指導を進める基盤」ともしている。このことから生徒理解を深化させていくことで教師と生徒が良好な関係を築いていくことはとても重要なことと考える。これまで生徒が人間関係を構築していく中で様々なストレスを感じ、その気持ちを問題行動に移すことで処理しようとする傾向が見られた。このことから教師が理解しようと努め生徒と良好な関係を保つことは、主題である問題行動の拡大防止に重要なことと考える。

7月のアンケートでは、「先生方との関係は良好だ」の質問に対して88%の生徒が「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した。しかし、私たち教師は、現状よりさらに良好な関係をつくらなければならないと認識している。

今後、生徒が考える「教師との良好な関係」をさらに良い関係にしていきたい。そのためには、具体的な活動を通して、教師と生徒の信頼関係を構築していこうと教師が意識して取り組むことが重要であると考えます。

(2) 生徒が自主的に学校での活動に参加し、自己有用感を育み、自己肯定感を高める

昨年、部活動に所属していないあるいは、学級内で係活動などの活躍する場が少ない生徒が問題行動に流されやすい傾向にあると感じていた。このことから日常生活に満足感を与えることがとても重要であると考えます。生徒が自主的に活動することで学校生活の満足感が得られると推測し、教師が生徒の活躍の場所・場面を設定した。

国立教育政策研究所の生徒指導リーフ18『自尊感情？それとも、自己有用感？』⁴の中では、社会性の基礎となるのは「自己有用感」であるとしている。他人を傷つけたり、ルールを守らなかったり、集団への参加を妨げたりする行為は、社会性の低さが原因であり、社会性を高めていくためには、「人と関わることって楽しい」「人と関わることは苦痛ではない」と感じる必要があるとしている。このことから、自主的に活動ができる場を設定することを通して、生徒の自己有用感を育み、自己肯定感を高めていきたい。

本校の生徒は、全国学力・学習状況調査のアンケートの「自分には、よいところがあると思いますか」という質問に対して「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という回答が、全国平均よ

² 国立教育政策研究所『問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方』2010年 p.18

³ 文部科学省『生徒指導提要』教育図書2010年 p.2

⁴ 国立教育政策研究所『生徒指導リーフ』2014年

りも大きく下回っている。(図1) このことから自己有用感を育み、自己肯定感を高める必要があることがわかる。

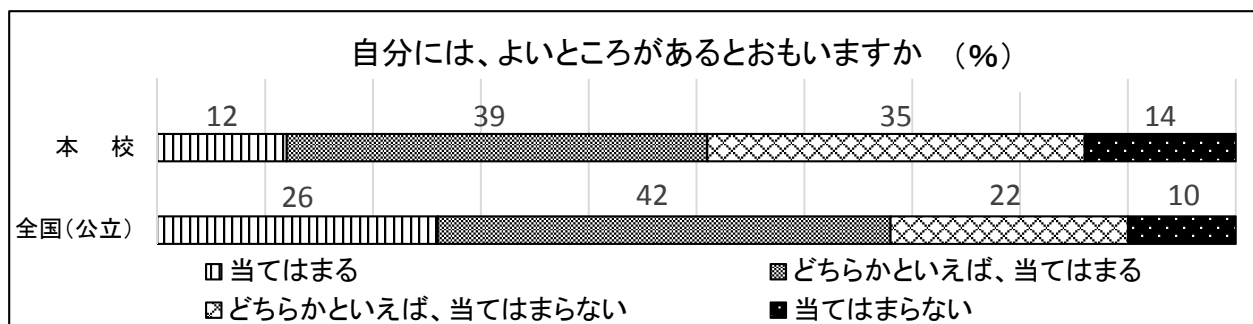


図1 平成27年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙調査結果

(3) 教師の指導力や資質を向上させ、生徒の様々な思いに対応できるようにする

教師と生徒の良好な関係をつくることや生徒の自主性を伸ばすこと、自己有用感を育み、自己肯定感を高めるための根幹となるものは教師の指導力である。教師一人一人が生徒理解に努め、生徒たちを良い方向に導いていこうとする態度が肝要となる。

生徒に対し、「あなたにとって良い先生とは、どのような先生だと考えていますか」という記述式アンケートを行った。回答として「分かりやすい授業をしてくれる先生」「良い所をほめてくれて、悪い所を叱ってくれる先生」「生徒と向き合ってくれる先生」「いつも挨拶をしてくれる先生」などがあつた。

生徒との良好な関係づくりのためには、授業の指導力を向上させることはもちろんのこと、日常の関わりの中で生徒一人一人の人格を大切にしようとする態度を生徒は求めている。

3 課題解決に迫るための具体的な取組

(1) 生徒と教師の良好な関係づくりのために

① 穏やかな生徒指導

校長のリーダーシップの下、全職員で「怒鳴らない指導」を意識して取り組んできた。日々の生徒との関わりの中でも言葉づかいや話し方には気を付け、指導場面において丁寧な関わりを心掛けてきた。問題行動が起こった時に、生徒の行動に対して、いきなり怒鳴りつけるのではなく、理由を聞く、あるいは生徒の様子や周囲の状況を判断してから対応するなど、穏やかな生徒指導を心掛けてきた。問題行動に対して一方的に叱りつけることは、指導が生徒の心に届かず、反省をさせるどころか、逆に教師に対して反発心を持たせてしまうことがある。昨年はそのような指導場面が多く見られ、そのことが問題行動の拡大につながったと考えている。このことから、怒鳴らず穏やかな生徒指導を実践することにした結果、生徒たちの中に「自分の行動の理由を聞き入れてもらった」という思いを持たせることにつながり、その後、自分の行動を落ち着いて振り返ることができた。また、生徒の良い部分に目を向け、良い行動が見られた時やできたことに対してしっかりと認める機会を増やしていくことを心掛けてきた。

②ふれあいタイム

主に1年生を中心に行ってきた。朝の8時から8時10分までの10分間、担任や副担任がクラスや廊下に行き、生徒とのふれあいの時間を作っている。この10分間は比較的早く登校する生徒がいる時間帯で、普段あまり教師と積極的にコミュニケーションをとることができない生徒がコミュニケーションをとることができる機会となった。教師も生徒も大切な時間として捉えている。

③あいさつ運動

国立教育政策研究所の『生徒指導リーフ 18』⁵では人間関係の希薄化は人と関わりたいという意欲の低下が原因としている。挨拶をすることで人との関わりができ、そこから関係づくりにつながり、人とのあたたかな関わりを感じることで社会性の基礎が出来上がり、自己有用感につながると考えた。生徒に行ったアンケートの中で「あなたにとって良い先生とはどのような先生だと考えていますか？」の質問に対し、「いつも挨拶をしてくれる先生」という答えがあった。このことからコミュニケーションの基本でもある挨拶を教師側から積極的に行っていくことは、生徒と教師の良好な関係づくりに必要であると考えて取り組んできた。

(2) 生徒が自主的に学校での活動に参加し、自己有用感を育み、自己肯定感を高めるために

①プログラム委員会と学級会の取組

生徒の自主性を高めていく取組として、「定期的なプログラム委員会の開催」が特別活動指導部から提案された。これは、クラスの課題について生徒が主体的に考え、その課題解決に向けて学級会で話し合い、クラス全体で問題意識を共有し、課題を解決していくという取組である。プログラム委員会で提案された議題を学級会で話し合い、クラスの課題を解決していく。これらの取組は生徒の自主性を伸ばすだけでなく、クラスが生徒にとって居心地の良い場所になっていくことにもつながっていくと考える。

②キャリア教育

今年度、本校は「キャリア在り方生き方教育」の研究協力校である。全職員で「キャリア在り方生き方教育」を意識した、教科・特別活動・総合的な学習の学習計画の見直しと、実践を行ってきた。主に「かかわる力（人間関係形成能力）」「さぐる力（課題対応能力）」を重視した。

「かかわる力」では、プログラム委員会や学級会での話し合い活動を充実させ、各教科においては、学習班を用いたグループ活動や、地域の方の出前授業、話し合い活動、発表などを行った。

「さぐる力」では行事後の振り返りで反省を行うだけでなく、学んだことを何に生かすことができるかを考えさせたり、今後の生活で何を意識すべきかを学級会で討論させたりした。また、委員会活動では学校生活についての課題を自ら見つけ、その解決を図っていくことを意識した場面の設定をした。教科においては調べ学習やグループ学習、ワークシートや思考ツールの活用、意見発表の場の設定を行った。

③生徒からの提案を検討

生徒の自主的な活動を促進するために、生徒議会において、生徒からの発案を大きく取り上げ、ルー

⁵国立教育政策研究所『生徒指導リーフ』2014年

ルを改めていくことを行った。例として「授業を受ける際のルール」について挙げたい。本校では、体育や技術、美術など、決められた服装（体操着やジャージ）に着替えなければならない教科以外は、必ず標準服で授業を受けることになっていた。しかし、生徒議会で生徒から新しいルールが提案された。技能教科に挟まれている1時間の授業のみ、ジャージや体操着で授業を受けても良いというルールであった。それを教員で検討し、変更をした。内容的には、学校生活をよりスムーズなものにしていこうという建設的な提案である。当初、職員の中でも反対意見があった。生活の乱れが加速するのではないかという心配があったからである。しかし、生徒議会で話し合いをさせることを通して、その他の服装の乱れについての改善が見られたことから、生徒からの提案が実施されるようになった。それ以外にも、「定期テスト前の残留禁止期間の改定」や「男子の体操着の変更」も生徒からの提案により変更された。

④各部活動の取組

本校では部活動の大会前に壮行会を行い、各部から大会に向けた取組や思い、目標などを全校生徒の前で発表しているだけでなく、顧問からも生徒の取組や大会に向けた思いや意気込みを話している。さらに今年度は、生徒の自己肯定感を育むために、各部の部長が書いた大会に向けた意気込みを、写真とともに掲示した。大会後の報告を含めて部活動の掲示物を作成し、結果報告や大会時の様子を写真で掲載した。

(3) 教師の指導力、資質向上に向けた取組

生徒との関わりの中で特に重要な部分である授業の質を高めるために、ICTの活用、ユニバーサルデザイン、アクティブ・ラーニングを意識して授業を行ってきた。ICTの活用に関してはプレゼンテーションソフトの活用や映像、写真の活用をした。体育ではビデオカメラで自分自身を撮影し、技能の向上に努める取組を行ってきた。ユニバーサルデザインでは、板書の工夫や本時のねらいの提示、流れの予告、指導は短時間で行う等の実践してきた。また視覚的に分かりやすくするためにイラストや写真、視聴覚教材を活用した。話し方の工夫としては、1文1動詞の話をすることを意識してきた。アクティブ・ラーニングに関しては、グループワークや生徒同士の話し合い活動を多く取り入れ、主体的、能動的な学習活動が行えるように工夫してきた。

4 具体的な取組の成果

取組の効果を測るために7月と同じ内容のアンケートを12月にも行った。3本の柱における具体的な取組の有効性をアンケート結果を基に検証していきたい。

(1) 生徒と教師の良好な関係づくりのための取組

「先生方との関係は良好だ」という質問に対し、「よくあてはまる」「まああてはまる」と答えた生徒は7月が88%で、12月が87%（図2）である。様々な取組の効果により高い数値を維持することができたといえる。7月のアンケートにおいて「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えた53人の生徒を12月のアンケートで追跡すると、53名中27名(50%)の生徒が「よくあてはまる」「まああてはまる」に転じ

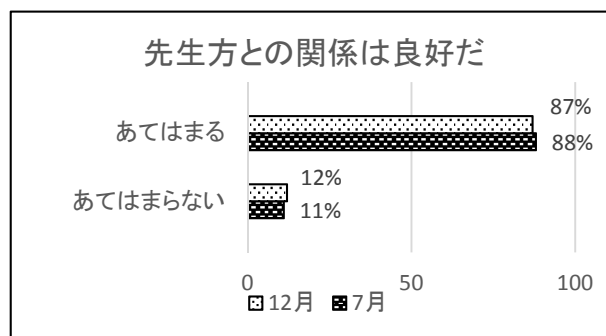


図2 「教師と生徒の関係」に関するアンケート

ていた。このことから、先生と良好な関係を築くことができていると感じていた生徒に対しては、一定の成果があったと考える。本校職員によるアンケートにおいても、「生徒の気持ちや状況をつかむことで、生徒との関係が良好になった」や「生徒の良い部分に視点を置き、ほめることで生徒が問題行動に流れてしまうことを防ぐことができたかもしれない」「生徒との会話に時間を割くことで、クラス全体の雰囲気良くなった」など、生徒との良好な関係づくりの成果を挙げる回答があった。しかし、全体的な数値は上がっていないことから、7月に「あてはまる」とした生徒が「あてはまらない」に転じていることは課題である。

(2) 生徒が自主的に学校での活動に参加し、自己肯定感や自己有用感を高めるための取組

「クラスの課題を自主的に解決できた」「クラスの係活動は楽しい」「自分は学校の活動に貢献できていると感じる」のアンケート回答から自主性や自己有用感、自己肯定感の変容を検証した。「クラスの課題を自主的に解決できた」の質問に対して「よくあった」と「たまにあった」とした生徒の合計は、7月は42%だったのに対し、12月では48%に上昇した。また、「クラスの係活動は楽しい」の質問に対して「よくあてはまる」と「まああてはまる」とした生徒の合計は、7月は61%だったのに対し、12月では72%に上昇した。「自分は学校の活動に貢献できていると感じる」の質問に対して「よくあてはまる」と「まああてはまる」とした生徒の合計は、7月は44%だったのに対し、12月では51%に上昇した。(図3)

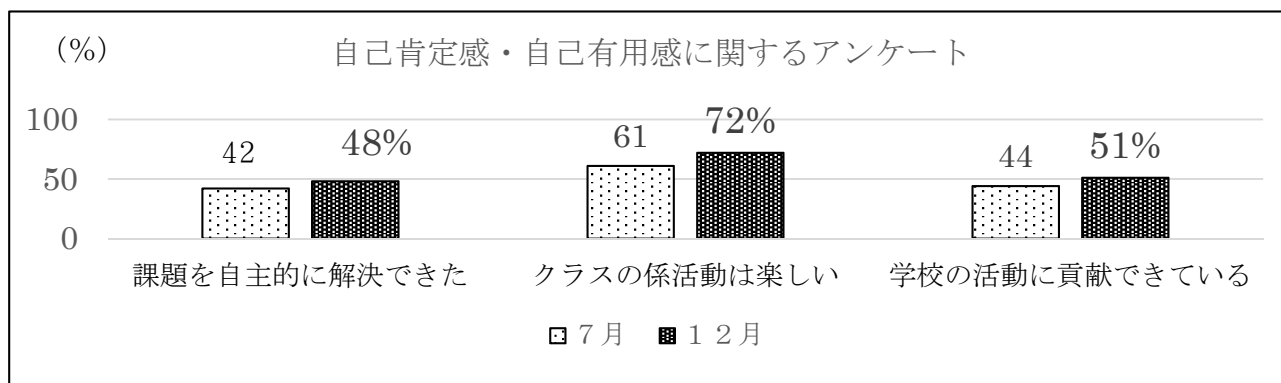


図3 「自己肯定感」「自己有用感」に関するアンケート

職員アンケートにおいても「グループワークを増やすことで意欲的な生徒が増えた」や「一人一人に役割を与えることで、生徒がお互いに良い視点で見られるようになり、お互いが認め合う場面も出てきた」「自分たちで考え、決定し、実践していくことに喜びを感じるようになり、自信を持って活動できるようになった」など、生徒の自主性や自己有用感、自己肯定感の高まりを感じさせる回答があった。アンケートの結果から、生徒の自主性を高めるための取組は一定の成果を得たと考える。

しかし、生徒の学校生活満足度については、「今の学校生活には満足している」の質問に対して、「よくあてはまる」「まああてはまる」とした生徒の合計は、7月は86%だったのに対し、12月では87%と変化は見られなかった。学校生活に満足している生徒の割合を顕著に増やすことはできなかった。また、7月のアンケートで「今の学校生活には満足している」の質問に対して、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」とした生徒の数は73人であったが、その73人の生徒の12月のアンケートの結果を見てみると73人中46人(63%)もの生徒が「よくあてはまる」「まああてはまる」に転じている。これは、生徒の自主性を高めるための取組が、「学校生活に満足していない生徒」に対しては一定の効果があつたと考えられる。

(3) 教師の指導力、資質向上に向けた取組

「授業は楽しい」や「授業は分かりやすい」のアンケートを行った。「授業は楽しい」の質問に対して「よくあてはまる」「まああてはまる」とした生徒の合計は、7月は70%、12月は72%と微増した。また、「授業は分かりやすい」の質問に対して「よくあてはまる」「まああてはまる」の合計は、7月も12月でも74%と高い数値を維持することができた。教師の工夫によって、生徒の興味がわく授業になり、授業の分かりやすさの部分においても維持することができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から学んだもの

本研究では、問題行動の未然防止と拡大を防ぐ手立てとして、大きな3本の柱を基に、落ち着いて学校生活を送りたいと思っている生徒が、自主的、主体的に学校生活を送ることができるようにしていく取組を行った。7月と12月のアンケート結果では、全体としては大きな変容は見られず、現状維持にとどまったが、「自主的な活動をすることができる」ということについては、生徒も成長を実感できたのではないかと考える。そして何より学校全体の雰囲気が昨年度に比べ、かなり落ち着いてきている。これは生徒指導の場面や不登校生徒数の減少からも分かることである。職員アンケートにおいても、生徒との良好な関係づくりや生徒の自主性を伸ばす取組、自己有用感を育み自己肯定感を高める取組の成果を挙げる回答が多くあった。教師の変容が生徒の変容につながることを実感することができたのではないだろうか。今回の取組を通して、教師が生徒を見る視点を変えたことや、教師集団が一体となって目標とする生徒像に近づける取組を行ったことが、生徒の変容を生み、個人の変容が集団の変容につながるということを学ぶことができた。

教師が指導方針を共通理解し、授業や特別活動を中心に、生徒との良好な関係づくりをしながら自己有用感を育み、自己肯定感を高める取組を増やしたことが、問題行動や器物破損の減少、不登校の生徒数の減少につながったのではないかと考える。また、教師が生徒を見る視点を変えたこと、授業や生徒との関わりに対する意識を変えたこと、生徒の自主性を高める取組等を行ったことで、生徒は自己有用感を感じ、自主性が芽生え、学校生活に満足感を得ることにつながったのではないかと考える。そして、これらの取組によって問題行動の拡大を防ぎ、教師と生徒の良い関係を礎にした、心が通い合うあたたかい学校に一步近づくことができたのではないかと考えている。

2 今後の課題

7月に教師との関係が「良好ではない」と感じていた生徒が、様々な取組を通して12月には「良好である」に転じたことを研究の成果として前向きにとらえたいが、「良好である」から「良好でない」に転じた生徒も同様にいた。これらの原因を考え、修正していくことが今後の課題である。また、本研究において「先生と話をする時間が増えたと感じる」という回答と「先生方との関係は良好だ」という回答をクロス集計したところ、「先生と話をする時間が増えたと感じる」ことがあった生徒ほど、「先生方との関係は良好だ」の回答が高い数値になっていた。よって先生との会話が多い生徒ほど教師との関係が良好であるといえる。今後は教師と生徒との「会話の量」だけでなく、「会話の質」を高め、一人一人の資質や意識の向上に努めていきたい。

また、教育相談や生徒指導においても研修を深めて、専門的な知識を活用しながらお互いが信頼で

きる関係づくりを構築していくことが今後の課題であり、学校全体で情報交換や意見交換をしながら、教職員の意識を高め、学校全体がチームとなり取り組んでいくことが課題である。

教師の指導力や資質の向上のためには生徒と関わる時間や教材研究の時間を増やす必要がある。そのためには学校行事の取組の精選や年間計画の見直しも課題となる。また、教師のスキルアップのための研修を行っていくことも課題としていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

吉田順	『生徒指導 24 の鉄則』学事出版	2000 年
犬塚文雄	『社会性と個性を育てる 毎日の生徒指導』図書文化	2006 年
会沢信彦・岩井俊憲	『今日から始める学級担任のためのアドラー心理学』図書文化	2010 年
吉田順	『荒れには必ずルールがある』学事出版	2013 年
諸富祥彦	『教師が使えるカウンセリングテクニク 80』図書文化	2014 年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事

中川 薫